

『新編八戸市史 通史編Ⅱ 近世』

石塚 雄士

本書は、「新編八戸市史」通史編全三巻のうちの第二巻として、寛文四年（一六六四）に始まり、明治四年（一八七一）の廃藩置県で終焉を迎えた八戸藩の時代にあたる、近世を対象とした一巻で、平成二十五年三月に刊行された。

巻頭の発刊のあいさつでは、通史編の刊行にあたり、八戸市史編纂委員会の各委員から「平易な文章」で誰でも「気軽に読める」研究書でない歴史書を、という要望があったことが述べられている。

自治体史の編さんにおいて、最新の研究成果を踏まえた、学術的に優れた内容であることが求められることは当然であるが、同時にその地域に暮らす人々に対して、事業の成果をわかりやすい形で還元することもまた、忘れてはならない非常に重要なことである。

その意味で前記の要望は、評者のように自治体史編さんに関わる者全てに投げかけられたものとも言えるが、学術的なレベルとわかりやすさのバランスをどう取っていくのかについては、とても困難な問題であると日々感じているところである。

さて、新編八戸市史は、これまでに刊行された資料編においても、読者の興味をひく内容のコラムを適宜設けるなど、読みやすさに配慮した構成となっていたことが印象的であった。

そして、先の要望を踏まえて執筆編集された本通史編は、さらに一歩

を進めてこの難しい問題に果敢に挑戦し、高いレベルで両者をバランスさせることに成功したのではないかと感じている。

本書を手にとってすぐにわかることだが、全体にフルカラーの写真や図がふんだんに盛り込まれており、まず読者の目を強く引き付けるよう、ビジュアル面に非常に配慮していることがうかがえる。

また、各章の記述も、これまでに刊行された資料編の内容をはじめとする、編さん事業を通じて得られた最新の研究成果が、平易でわかりやすい文章でまとめられている。

ここで、本書の構成について述べる。

第一編 藩政の歴史

第一章 八戸藩のはじまり

第一節 八戸藩の成立と初代藩主直房

第二節 幼少の二代藩主直政

第三節 藩政の確立へ向けた改革

第四節 徳川綱吉政権と元禄期の藩政

第五節 八戸藩の石高と人口

第六節 藩境問題と境塚の築造

第七節 盛岡藩との領地交換

第二章 打続く飢饉と財政難

第一節 歳入不足と膨らむ借金

第二節 計画的歳出を図る御仕送制

第三節 信玄流による軍制の確立

第四節 複雑化する行政組織

第五節 参勤交代と幕府への勤め

第三章 藩政改革と百姓一揆

第一節 藩政期最大の天明飢饉

第二節 寛政一揆と改革の挫折

第三節 野村軍記の登場と文政改革

第四節 文政改革の展開

第五節 天保の百姓一揆とその後の藩政

第六節 鹿児島から来た九代藩主信順

第七節 異国船の出現と海防体制

第四章 八戸藩の終焉

第一節 幕末期の世情と藩政

第二節 戊辰戦争と八戸藩の動静

第三節 転換期の藩政機構

第四節 廃藩置県と青森県の誕生

第二編 人々のくらし

第一章 海に臨む八戸

第一節 漁業／豊かな海の産物

第二節 海運と交易／行き交う廻船と産物

第三節 造船／渡し船から千石船まで

第四節 製塩／海岸線に並んだ塩釜

第二章 陸と川の交通

第一節 陸上交通／藩内外を結ぶ道

第二節 河川交通／対岸や下流へ

第三節 情報の伝達／飛脚による情報ネットワーク

第三章 山の利用と鉱業

第一節 製鉄業／九戸郡山中の経済活動

第二節 その他の鉱業／金銀山から琥珀まで

第三節 木炭・薪／豊富な森林資源の利用

第四章 生産となりわい

第一節 農業／寒冷地農業と人々の知恵

第二節 畜産／生活の中にいた馬

第三節 酒造／殿様から庶民までの友

第五章 城下町と周辺の町村

第一節 八戸城下の成立／八戸中心街の誕生

第二節 城下町の構造と発展／人が集まり、広がる町

第三節 商業と金融／全国の商品経済の中で

第四節 代官と農村支配／村落の行政組織

第五節 在町／各地の生活を支える町

第六章 人々を苦しめた飢饉と災害

第一節 凶作と飢饉／四大飢饉を乗り越えて

第二節 大きな災害／地震・津波の多発地帯

第三節 獣害／人々による生態系の破壊

第七章 豊かな文化と人々

第一節 学芸と教育／文芸に親しみ、学ぶ人々

第二節 宗教／生活に密着した宗教

第三節 祭礼／町の祭り、村の祭り

第四節 武芸／技能の伝授と創意工夫

第八章 八戸の風土が生んだ安藤昌益

以上の構成を一見してわかるとおり、本書は全体が大きく二編に分けられており、そのうち第一編が藩政の編年的な叙述、第二編が産業・社会・文化などの分野ごとの叙述となっている。章節毎のテーマ設定は全体を概観し、その時代を知る上で過不足無いものとなっており、本書の主たるターゲットとなる研究者以外の人々が、藩政時代の八戸を概観する、あるいは自分の関心に基づいて本書をひもとくにあたって、戸惑うことは少ないのではないかと思われる。

また、八戸の生んだ大思想家である安藤昌益についての一章が特に立てられていることは、地域の豊かな歴史や文化を伝える本書の特色として挙げられてよいものだろう。

ここからは本書の叙述について見ていきたい。

第一編では、第一章が八戸藩成立から二代藩主南部直政に至るまでの藩政成立期、第二章が宝永期から安永期までの藩政中期、第三章が天明期から嘉永六年（一八五三）のペリー来航までの藩政後期、第四章が明治四年（一八七二）の廃藩置県に至るまでの幕末維新时期と、章ごとにそれぞれの時代における藩政の状況等が要領よくまとめられている。

第一章は、幕府や盛岡藩との関係において様々な見方が存在する八戸藩の成立について、現時点での最新の研究成果を踏まえて簡潔に叙述している。また、藩政の実務を執った上級家臣団に焦点を当てることで、

従来、幕府中枢への参画という面が目立っていた感のある二代藩主直政の治世を、国元での藩政成立期という視点で捉え直すことに成功しているように感じた。

第二章は、藩財政の規模及び収支、財政窮乏化を受けた歳出改革に触れ、藩政の組織について述べたあと、幕府から八戸藩が命ぜられた種々の課役の実態について大きく紙数を割いて叙述している。

幕府からの課役は、本章の主題である財政窮乏化の主な要因の一つであり、内容も江戸城警備の実態など興味深いものであることから、ここに重点を置いたことは理解できる。だが、章内の他の部分と比較して、若干記述の量的なバランスがとれていないように感じた。

第三章は、天明飢饉の惨状を述べ、寛政期と文政期の藩政改革とそれに反発する百姓一揆の発生、改革の挫折について叙述し、藩政後期から幕末期の藩政に大きな影響を与えた九代藩主信順の相続及び領内海岸警備について叙述している。

強力な専売制の導入や、藩内の商業資本を依存的に活用した財政再建策の採用など、改革の内容がわかりやすくまとめられており、八戸藩の特色が最もよくうかがえる章であると感じた。

第四章は、幕末期の世情とそれを受けた藩政の動向から、戊辰戦争期の対応、廃藩置県に至るまでの藩政機構の変遷について叙述している。

本章の前半にあたる戊辰戦争に至るまでの記述は、民間の記録等を用い、民衆の視点を交えてまとめることで、明治維新までの世情や、戊辰戦争期の混迷を極めていた状況等についての重層的な理解を助けている。その反面、後半の廃藩置県に至る部分は、特色ある藩政の動きも少

なく、資料的な制約もあったのか、かなりあつさりまとめられている。

続く第二編では、第一章で海に関わる生業、第二章で河川を含む陸上交通と情報伝達、第三章で各種鉱業と森林資源の活用、第四章で農畜産及び酒造業、第五章で八戸城下及び農村・在町と商業活動等、第六章で飢饉・災害、第七章で文武の諸活動や宗教・祭礼、第八章で思想家安藤昌益について、それぞれのテーマに沿った盛りだくさんな内容を過不足なくまとめている。

本編の構成として最も評者の目を引いたのは、第一章に海にまつわる産業を取り上げているところである。さらに章内も最初に漁業、次に海運という順番となっており、読者はこの構成を一見するだけで、八戸という地域の特色をおおよそ理解できるのではないだろうか。

このような構成における配慮は、第三章に、こちらも八戸藩の主要産業の一つであった製鉄をはじめとする鉱業に関する章を置いたことから読み取ることができよう。

そして、これらの特色ある産業についてはもちろんのこと、第四章の農畜産業に関しても、八戸領内における稼行の様子を図表等を適宜使用しながら詳細に叙述しており、読者の理解を大いに助けてくれている。

こうした記述における配慮は、第二章の陸上交通及び河川交通についての部分でさらに顕著であり、八戸周辺に土地勘のない評者にとっても、図表や地図等をふんだんに使った叙述は理解しやすかったものである。

ただ、第一章で海運について触れたことから、関連して第二章に交通と情報伝達に係る章を置いた意図はよく理解できるが、産業は一連の固まりとした方が通読する際にはわかりやすかったのではないだろうか。

第五章は八戸城と城下の成立、町政機構と商業・金融、村落と農村支配、藩内の地方の生活を支える在町について、というように幅広い内容の記述があり、非常に読み応えがある章となっている。

第六章は飢饉と災害等についての章である。北東北の諸藩にとって、まさに藩政を根底から揺るがすほどの大損害を与えた数度の飢饉や、繰り返し発生する地震・津波等の災害についての記述に加えて、とくに読者の目を引くのは獣害という項目で一節が立てられていることであろう。

獣害そのものは八戸藩特有のものではない。だが、同藩では猪による害が「猪飢饉」という言葉を生むほどに深刻だったという特徴がある。

そこには人間活動が大きく影響していたのであり、自然環境と人間活動のバランスが崩れた時に何が起きたのかを伝える本節の叙述は、過去の教訓を未来に活かす重要な意義を持っている。

第七章は、八戸藩で盛んであった俳諧や和算などの学芸活動や教育、寺社や修験道などの宗教者の活動、代表的な年中行事である三社大祭とえんぶり等の祭礼、現在も伝わる騎馬打毬などの武芸等、学問や文化活動、宗教活動について通覧できるようにまとめられている。

第八章は安藤昌益について、単に郷土の偉人として彼の人となりや思想を紹介するのみにとどまらず、彼の思想の基礎となる当時の世情や彼自身の社会的な立場、思想を深化させる過程を丁寧に叙述している。

さらに、本章が本書の掉尾を飾っていることから、安藤昌益という人物とその思想は、八戸藩の政治や文化、そして災害や飢饉といった状況全てを踏まえ、まさに本章の章題の通り「八戸の風土が生んだ」ものとして理解されるべきものである、という意図を感じたというのは

あまりに考えすぎであろうか。

さて、本書を通読してみての感想として、繰り返しになる部分もあるが、章内での記述の濃淡がやや目立つ部分があることが気になった。当該の時代について網羅的に記載せざるを得ない通史編の性格を考えると、資料的に制約のある部分や動向が不明な部分について濃淡が生ずることは当然とも言えるが、章内のバランス的な観点から、構成や章題にもう一工夫あっても良かったのではないだろうか。

また、同じ事柄について叙述が繰り返されるとき、まるで章節がそれぞれ独立しているような印象を受ける部分があった。政治史的部分の叙述での藩主の事蹟と同時期の藩政の展開については、当然重なる部分もあることから叙述が繰り返されることはやむを得ない。そして複数の執筆者で分担して原稿を執筆している事情もよく承知している。だが、通読する読者にとっては若干混乱することもあると思われ、原稿の最終調整の際に各章節毎の記述のつながりに配慮したならば、さらに全体が読みやすくなったであろうと感じた。

あれこれと勝手なことを申し述べてきたが、これら評者の指摘は全て、あえて毛を吹いて疵を求めるがごとき瑣末なものであり、本通史編は平成十年から始まった市史編纂事業の総仕上げとしての一編にふさわしく、地元の歴史を知ろうとする市民や多くの人々の期待にまさに応えるものであるといえよう。

そしてまた、評者にとっても、自身が携わる青森県史編さん事業において通史編の刊行が目前に迫ってきている折、非常に参考と刺激をいただいた次第である。関係者各位のご努力に心から敬意を表したい。

(A5判、五九五頁、八戸市、二〇一三年三月刊、三〇〇〇円)
(いしづか・ゆうじ 青森県史編さんグループ)